



UU now

ユー・ユー・ナウ
Vol. 16

発行：宇都宮大学 編集：広報室
〒321-8505 栃木県宇都宮市峰町350
TEL 028-649-8649 FAX 028-649-5026
URL <http://www.utsunomiya-u.ac.jp>
E-mail plan@miya.jm.utsunomiya-u.ac.jp

わが道を往く

OB INTERVIEW キャンパスは若い血を蘇らせてくれる



画家

白井 永雄

Usui Nagao

[うすいながお]1933年栃木県矢板市生まれ。61年宇都宮大学学芸学部(現教育学部)美術科卒業後、中学校美術教師。67年渡仏、パリ国立美術大学で学ぶ。サロン・ドートンヌ入選。80年ニューヨーク国際美術展招待出品、フランス代表として銀賞受賞。82年パリ文化団体A.M.O.R.C主催により白井永雄個展開催。毎年、日本で個展を開催。パリ在住。

パリに暮らして40年、フランス語を交えながら自由奔放な生き様をユーモアたっぷりに語る白井さん。その話には母校・宇都宮大学への愛着が滲む。

(取材/教育学部3年・岩上恭文)

恩師の油絵

「やはり、いいね。力強い。大
学本部応接室に掲げられた故矢
口洋氏の油絵。水差しのある静
物」をじっと見詰めながらつぶ
やく。やがて、柔らかな表情に
変わる。取材前の白井さんの印
象的な姿だ。

戦後の栃木県美術界をリード
し、宇大教育学部で美術教育の
実践に精力的に取り組んだ矢口
氏の絵との出会いが、自身の将
来を決定付けた。

高校卒業後、6年間小学校の
代用教員として「山の分教場」
で過ごす。当時、田舎では油絵

を直に目にする機会はなかった。
初めて目にした本物の油絵が、
宇都宮市のギャラリーで開かれ
ていた矢口氏の個展だった。

「熱っぽい作品を見てびっくり
した。すごい絵だと思った」。
その時の鮮烈な印象を今もはっ
きり覚えている。「先生がいる
宇都宮大学に入学したい」。

24歳で、美術科に入学し、矢
口教授の教えを受ける。卒業後
は故郷、矢板市の中学校で美術
教師となる。「また、山の学校
に戻って、放課後、風景の絵を
描いて暮らす。一生、『山の中
の先生』でもいいなと思った」。

それが、突然、穏やかな教師の
暮らしを捨て、「油絵の本場で
学ぶ」ため渡仏、パリ国立美術
大学に入学する。「(フランス留
学をしている)矢口先生の真似
をしてね。絵もそうだけど、ア
ルチュール・ランボーや、ポー
ドレルなど文学を通してフラ
ンスへの憧れがありました」。

未来は予測していなかった

「まったく未来は予測していな
かった。パリでの生活は、た
だただ絵を描いて、美術館に通
い、仲間と語り合った。68年の
「5月革命」のときは学生と一
緒にカルチュエラタンをデモっ
た。デカダンスな、ニヒルな、そ
んなものをひきずっていた。パ
リに行ってから学生時代の延
長だった」。

「絵描き」として生きていくこ
とを決意したのは、50歳を迎え
ようとしているときだった。パ
リの文化団体が主催した白井氏
の個展が評判を呼び、地元メ
ディアも好意的に取り上げてく
れた。「自信が持てるように
なった。これでプロを宣言して
もいいだろうと思った。それに
しても(50歳を前にして)のプロ
宣言は(ゆっくりですね)」。

いまは、南仏プロヴァンスの
自然を描く。「高原山の麓で育
ちましたから、年をとるにつれ
ソバージュというが、野性味っ
ぽいものに引かれるようになって
た。プロヴァンスはそういうと
ころが多い。光がすばらしい。
ルミエールですね」。

大学時代のエスプリ

宇大を訪ねるのは卒業以来と
いう。「キャンパスに足を踏み
入れたら若い血が蘇ってきた。
75歳のお爺ちゃんだけど、また
まだ少年のようなところがある
のは、暴れまくった大学時代の
エスプリが残っているからか
な」。

「キャンパスの雰囲気が好き
だった。一生ここで仕事ができ
たらいいなと思った。卒業する
時は正門に掲げられていた宇大
の看板を奪い去ってしまったおっ
と「思った」と笑う。

なぜ、宇大の看板を? (愛
着のある大学の)看板を抱えて
一生過ごしたかったのかな。何
か、逸脱したことをするのが好
きだったのかもしれない。い
ま話していると、そういう血が
また沸いてきます」。